

暮らしを支えるみなとの情報誌
Vol.99 March 2022

100th
since 1922
Anniversary
日本港湾協会

特集

港湾の気候変動対策

稿 三村信男 茨城大学特命教授
寄 気候変動対策をめぐる科学の進展と
国際動向
別 森 信人 京都大学・防災研究所教授
特 潮位・波浪等に係る
気候変動予測技術の最先端の状況

港湾

3

月号



公益社団法人日本港湾協会
The Ports and Harbours Association of Japan

と の う ら
外ノ浦と北前船

はじめに

島根県西部に位置する浜田市は、石見国の中心部の日本海沿岸に位置し、外ノ浦は細長い入江を持つ天然の良港として栄えました。江戸時代の文献に、「戸の浦（外ノ浦）という上下とも能き湊あり」（『増補日本汐路之記』）と記され、北前船が寄港する風待ち港として、近代にかけて多くの廻船で賑わいました。



現在の外ノ浦の様子

外ノ浦の成立

元和5年（1619）、浜田川河口の海に面した場所に浜田藩が成立し、城下町が築かれました。外ノ浦は、浜田城下町に隣接した場所に位置しますが、江戸時代初期の城下図には「うばかふところ（姥ヶ懐）」と記され、建物や船はほとんど描かれていません。

外ノ浦の廻船問屋である清水家に残された諸国御客船帳（日本遺産構成文化財・浜田市教育委員会所蔵）には、国別、地域別に整理した廻船の詳しい情報が記されています。客船帳とは、取引をしている廻船の宿泊名簿で、延享元年（1744）から明治35年（1902）の間の8,906艘の廻船が記されており、当時の繁栄の様子が知ることができます。客船帳が延享元年（1744）からの記録であることや外ノ浦にある金刀比羅神社が享保5年（1720）頃創建と伝わることから、西廻り航路が整備され、北前船が台頭した18世紀中頃に外ノ浦が成立したと考えられます。金刀比羅神社には、宝暦9年（1759）の年紀が刻まれた花崗岩の鳥居が残されており、船頭たちは航海の安全を祈願し出航しました。

客船帳から見る外ノ浦

客船帳には、顧客情報だけでなく、積荷の売買の記録も記載されています。これを見ると、揚荷の中心は米、塩、砂糖、種油、大豆等で、積荷は、扱苧（麻の繊維）、干鰯、鉄、半紙、やきもの等の商品が中心です。これは、山がちで平地の少ない島根県西部の

地理的特徴が関係し、浜田に不足する米を買い入れ、半紙、鉄、やきもの等の特産品や海産物を売る様子が見てとれます。特に、文化・文政期（1804-30）以降、北陸地方の北前船が増加しており、外ノ浦が風待ちの港としてだけでなく、商品売買にとっても重要な役割を果たしました。外ノ浦の発展の背景には、安全に船を停泊できる地理的条件だけでなく、城下町に隣接する立地条件の良さがあったと考えられます。こうした繁栄は外ノ浦に入港する廻船の様子や廻船問屋の建物を描いた文化2年（1805）の「とうがねうらよりながはまうらにいたるかいがんえす自唐鐘浦至長浜浦海岸絵図」（日本遺産構成文化財）や天保5年（1834）の銘がある日和山方角石（日本遺産構成文化財）から垣間見ることができます。方角石が日和山に残っているのは、全国でも数が少なく、船頭たちが風や潮などを確認した姿を思い描くことができます。



諸国御客船帳（日本遺産構成文化財・浜田市教育委員会所蔵）

おわりに

近代に入ると、石見焼や石州瓦が船で運ばれました。こうした製品は、日本海沿岸地域に残されており、当時の繁栄と経済交流を知ることができます。大正10年（1921）山陰線が開通し、船から鉄道へと輸送手段が変遷していくなかで、外ノ浦は港としての役割を終えました。

現在の外ノ浦には、当時と変わらない地形や景観が残されています。また、北前船によって運ばれた石見焼や石州半紙の歴史と伝統は今に受け継がれています。

平成30年（2018）、外ノ浦は日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」に追加認定されました。また、令和元年（2019）に、浜田城と日本遺産・外ノ浦を紹介する施設として、浜田城資料館を開館しました。外ノ浦へお越しの際は、是非とも浜田城資料館へも足をお運びください。